

## 「主はわたしの牧者」

(ヨハネによる福音書 6:4-15)

今日の福音書は、いわゆる「五千人の供食」の箇所です。先週に続き「過越祭」近くの出来事として記されています。パンが増える奇跡は他の福音書にも見られますが、ヨハネによる福音書だけが過越祭と結び付けられています。ヨハネによる福音書は、過越祭の中心に主イエスを見えています。先週の福音での「宮清め」は、三度記されているヨハネによる福音書の過越祭の一回目、今日の箇所は二回目です。先週の宮清めにより、主イエスこそが待望のメシアであり、礼拝すべき方であることが示されました。今日の箇所では、過越の出来事が隷属状態からの解放、つまり死から命への出来事であったのと同じように、十字架の死と復活へと歩まれる主イエスこそ、「命のパン」であることが示されています。

山の上におられた主イエスと弟子たちの元へ、人々が続々と登ってきました。その数は男性だけで五千人と書かれていますので、女性や子供たちなどを含めると一万人いたとも、一万五千人いたとも言われます。一万五千人というと日本武道館が一杯になるくらいの人数です。それだけの人が山にいる主イエスの所へと押し寄せた。すごい光景です。彼らは主イエスがなされた様々な奇跡を目の当たりにしたから集まってきたのです。主イエスのなされた奇跡は、主イエスがどのような方であるかの「しるし」でした。しかし、人々はそのしるしを正しく理解していたわけではありません。当時のユダヤ人たちはローマの傀儡政権の下で実際の生活も宗教的にも厳しい状況におかれており、救い主の出現を心から願っていました。「もしかしたらこの人が、わたしたちを救い出してくれるかもしれない」と人々は期待したのです。そんな人々が大挙して山を登ってきます。目をあげてその人々をご覧になった主イエスは、そのような人々の苦しみを心から感じ取ったのでしょう。人々の「空腹」を満たしたいと思われました。しかし、一万五千人分の大量のパンが手に入るはずがありません。山の上で、大金もかかる。わたしたちの常識で考えれば不可能です。「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」と問われたフィリポは困り果てたことでしょう。いや、そんなことは無理だと、はじめから考えることすらしなかったかもしれません。それほどに現実的には無理な話なのです。フィリポは 200 デナリオン（労働者の 200 日分の賃金）のパンでも十分ではないと答えます。また、五つのパンと二匹の魚を持った子どもに気付いたアンデレも、「これでは何の役にも立たないでしょう。」と言うのです。弟子たちの目には、パンを配り、皆が満たされることなど不可能、いうなればそれは「絶望」的とすら言えます。しかし、主イエスの目に、その光景は「絶望」とは映っていません。主イエスは少年の持っていたパン五つと魚二匹を受け取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられました。欲しいだけ分け与えられました。人々は満腹しました。さらに残りを集めると十二の籠がいっぱいになりました。主イエスはまたしても、奇跡という「しるし」によって、神の国を人々に明らかにされました。神の国では誰もが、空腹を満たされる。神はわたしたちの飢えや欠けを必ず満たしてくださる。それも、人間の限界や想像をはるかに超えて、それをかならず実現してくださる。その神を信じ、主イエスを信じるなら、あなた方には奇跡としか思えない神の国が実現するのだと、主イエスは示してくださったのです。

主イエスが人々を座らせたのは、草がたくさん生えているところでした。この光景は、神が民を「青草」の茂る牧場へと導き、彼らを豊かに養うということが歌われる、詩編 23 編やエゼキエル書 34 章の「青草」を思わせます。つまり、「良い羊飼ひ」である主イエスこそが、真の牧者

として民を導き、人々を養うのです。パンの残りが十二籠になったことに示されている通り、その食事は枯渇することはありません。人間の目には絶望に見える状況も、主イエスには希望があります。主イエスの受難と復活によって決定的に示される、絶望の先の希望が、主イエスにこそあることが、この食事の場面でも明らかにされているのです。もしも満腹した人々がこの奇跡、「しるし」の意味を正しく理解し、主イエスに従って歩むことができたなら、彼らは青草の上で、本当の意味での空腹を満たされるはずでした。しかし、彼らはそれができませんでした。群衆が「しるし」に見たのは、主イエスの「利用価値」でした。彼らは神の思いを見るのではなく、自らの願望を叶えてくれるかどうか、そればかりをしるしに求めたのです。だからこそ人々は、自分たちを支配国ローマから解放し、この満腹が続くようにと主イエスに期待をかけ、主イエスを自分たちの希望を叶えてくれる王に祭り上げようとしていくのです。「しるし」を巡って、主イエスと人々の間にズレがあることは明らかです。しかし、主イエスは誤解されたままでも「パン」を与え続けます。なぜなら、「しるし」が正しく理解され、人々がまことに満たされ、神の国が訪れることを信じているからです。それこそ、大勢の群衆へと「目を上げて」ご覧になった主イエスの眼差しに表されている通りです。主イエスは十字架上で自らの命を投げ出してまでも、わたしたちに死と復活という決定的な「しるし」を示し、神への道を完全に開き、まさにまことの神殿となってくださいなのです。

主イエスは人々の期待通りにならず、力でローマをねじ伏せるようなことも、強力なリーダーシップを発揮することはありませんでした。そんな主イエスに人々は徐々に苛立ち、腹を立て、ついには十字架につけろ！と叫びます。そこにあるのは、自らの期待が裏切られたことへの怒りに支配されてしまった人間の姿です。そして、それは他でもない、わたしたちと同じ人間の姿なのです。わたしたちもまた、十字架につけろと叫ぶ人々と同じ人間です。わたしたちも、神の思いよりも自分の思いに支配されてしまうことが往々にしてあります。それどころか、神に期待をかけ、叶えられないと失望し、神を恨みさえする。さらにひどい時には、こんな神は必要ないと、人間の側から神を裁こうとすらするのです。フィリポやアンデレのように、わたしたちも現実の状況のなかで絶望に視界を遮られ、神の力を信じることができなくなってしまいます。神はわたしたちの祈りや願いを、わたしたちの思いや想像をはるかに超えて叶えて下さる、ということを感じることがなかなか出来ないのです。「わたしが命のパンである」と言われる主イエスを信じることができず、すぐにでも腹を満たしてくれるような神を求め、地上の富、人からの誉れ、朽ち果てるものを永遠かのように思い込み、そればかりを追い求め、いつも不安や喪失感にさいなまれます。

しかし、そんなわたしたちのためにこそ、主イエスは十字架にかかってくださいなのです。絶望の先があることを信じ抜くことができないわたしたちのために、自らの命を投げ、死の先の復活、絶望の先の希望を示してくださいなのです。その主イエスは、「まことのパン」である主イエスは、今も変わることなく、み言葉を通して、聖餐を通して、あらゆる物を通してわたしたちを養い続け、わたしたちの血となり、肉となってくださいます。わたしたちは、わたしたち自身では変わることができずとも、主イエスが養ってくださいから、少しずつかもしれないけれども、神の力を信じる者、奇跡を信じる者へと変えられるのです。

主イエスの奇跡は、少年の差し出した五つのパンと、二匹の魚から起こされました。小さなものでも、神の元に感謝のうちにささげられ、分かち合われたとき、大勢の人を満たす糧となりま

した。わたしたちもまた、はじめから諦めるのではなく、この少年のように、小さくとも行動を起こす、差し出すことが求められています。どんな小さなものでも良い。それぞれが神から与えられたものを神に感謝とともにささげることができるなら、そこから神の国が実現していきます。そんな奇跡としか思えないようなことを神はお出来になります。主イエスに養われ、少しでも信じる者とされたなら、小さくとも差し出してみましよう。必ず神の大いなる業を目の当たりにするでしょう。そんな素敵なお事に参与しない手はありません！

山の上に大挙した人々へ目を上げられた主イエスは、「しるし」を通して、神が人を放っておくことはなく、死をも滅ぼして、希望へといつでも救い出すことを示してくださいました。その眼差しはわたしたちにも向けられています。主イエスは今日もわたしたちを養い、奇跡を信じる者へと変えてくださるのです。その主イエスによって養われ、少しずつかもしませんが、わたしたちの想像をはるかに超えて叶えてくださる神の業を信じる者へと変えていただき、自分自身を神の元へと感謝とともに差し出し、神の国の実現へ参与する者として用いられますように。